

光明精舎夜話

静かに夜は訪れて来ます。明るい電燈の下には、狂風、佐々繁、臺、父、その他たくさん集っています。色々と面白い話題が出て、更けるまで話がはずみます。

丙「そうですか。さつき来ておられたのは△△さんでしたか。さっぱり見忘れていました。それならそのように挨拶するのでしたのに。」

甲「学院などの生活は嫌なところがあるらしいね。」

丙「そうだ、そうですね。初から布教家になる免状をとるために学ぶということは、生命を育ててゆくということから見ると墮落かも知れませんか。」

甲「それにやはり先輩であるある女教士の方が布教練習や、講話の材料を集めることに骨をおれというのだそうですが、私には妙な嫌な気がしますね。」

乙「時に先生、念仏ということですね。私は時々念仏なんか全く称えたくないことがあるのです。口称念仏ということではなくてもいいのではありませんか。」

丙「そりやいけないよ。」

乙「何故だ。信心一つで往生は決定するので称名は報恩ではないか。だから称名でたすかるのではなくて信心でたすかるのだ。念仏を称えるということでは助かるのではない。僕は信心だけでいいと思うのだ。」

丙「もちろん信心が涅槃の真因であることは言うまでもないことだが、その信心には称名が当然ついておるのだ。」

乙「ではもし、口称念仏がつかねば、往生は出来ぬというのか。」

丙「そうだ。だから第十八願のことを念仏往生の願と言ってあるではないか。」

乙「そりや法然上人は、念仏為本とおっしゃったけれど、親鸞聖人は深く本願文にふれて、信心為本とおっしゃったではないか。だから称名がつかねば往生は出来ぬということとはまちがいだ。」

甲「なかなか面白い。すっかりやれ。」

丙「御本典の行巻を一寸見ればすぐわかることだ。行巻の最初に『謹んで往相の廻向を案ずるに大行有り。∴大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり。』とあるではないか。更に行巻をみれば聖人は法然上人の選択本願念仏集の御文に『夫れ速に生死離れんと欲はば二種の勝法の中、且く聖道門を擱きて、謹んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば正・雜二行の中、且く諸々の雜行を抛てて、選んで正行に帰す應し。正行を修せんと欲はば、正・助二業の中、猶助業を傍にして、選んで正定を専にす應し。』正定之業』とは、即ち是れ仏の名を称するなり。名を称すれば、必ず生ずることを得。仏の本願に依るが故なり』とあるのを引いておられる。明らかに正定の業というはすなわちこれ仏名を称するなり。と言っていられるではないか。」

乙「それなら称えたら往生が出来るよと云えば称名為本になるではないか。僕には賛成は出来ぬ。いったい先生どうなのですか。」

甲「もちろん、行によらないで信心が往生の真因です。」

丙「それでは『念仏成仏これ真宗』の御言葉はどうなるのです。」

甲「南無阿弥陀仏と称えなければなりません。称えねばおかれぬのです。」

乙「称えねば往生出来ぬのですか。」

甲「そう称えねば往生は出来ぬと、称名を条件づけるのではないのです。眞実信心には念仏はついてあるのです。」

乙「私には、それがのみこめませぬ。私は信心為本だと思ひます。念仏は問題でないと思ひます。」

甲「末燈抄を開いて見ると『……その故は弥陀の本願と申すは、「名号を称えん者をば極樂へ迎へん」と誓はせ給ひたるを深く信じて称ふるがめでたきことにて候ふなり。信心ありとも名号を称えざらんは詮なく候、又一向名号を称ふとも信心あきくば往生しがたく候。されば念仏往生と深く信じてしかも名号を称えんずるは疑無き報土の往生にてあるべく候ふなり。』とあります。これで見ると、眞実信心には名号をとものうております。称名には必ずしも信心をとものうてはいませぬ。」

丙「だから眞実の意味における念仏じゃ。」

乙「だから眞実の意味における信心じゃ。」

丙「でも君は称名はいらぬと言つたじゃないか。」

乙「もちろん往生の一大事にはいらぬのさ。」

丙「いや、それがちがう。『信心ありとも、名号を称えざらんは詮なく候。』とあつたじゃなか。」

乙「それでは称名を往生の条件とする気なのか。」

丙「そうではない。称名報恩なのだ。」

乙「それだから、称名はあつてもなくてもいいのだ。」

丙「そりやちがう。称えねばおれぬのじやないが御念仏は添うのじや。」

乙「称えねばいけぬなどと考へて称える念仏が役にたつものか。」

丙「そりや言論の論点がちがう。眞実信心には念仏は必ず具足してあるといふのだ。『念仏は行者のために非行非善なり。わが計にて行ずるに非ざれば非行といふ。わが計にてつくる善に非ざれば非善といふ。ひとえに他力にして自力を離れたる故に行者のためには非行非善なり。』とあるように、他力廻向の信心には必ず他力廻向の大行、即ち念仏は自然としてつくべきものだ。」

甲「信心為本であることはもちろんであるが、その信心には必ず名号を称えるといふ行もまた廻向されてあります。」

乙「行がなくてはいけぬのですか。」

甲「いけぬというように条件づけるのではなくて、もつと、自然に仏より廻向されるのである。もとより念仏の行者とあります。念仏行者なのです。それが称えねばならぬとか、称えなくともいいとか人間のはからいが棄つた自然の念仏です。」

乙「もつとはつきり言つて下さい。」

甲「称えねばならぬと言へば窮屈な世界になります。称えなくてもよいのだと言つてしまへば人間の放漫な世界しかなくなります。」

乙「では称えよとの条件ではない。けれど称えねばならぬ……ですか。どうものみこめませぬ」

甲「内なる生命のたぎりは、きつと外への躍動となります。他人に会った時私どもは心から敬礼することがあります。その時には腰をかがめます。尊敬の心は、敬礼の態度となつて表れるではありませんか。」

乙「その場合大切なのは尊敬する心だと思ひます。」

甲「それはそうです。でも頭を下げるのは意味をなさぬことだといひますか。」

乙「……………そうは言われませぬ。」

甲「そうでしよう。尊敬の心のない時、たつた一人で腰を前にかがめたり、頭を前にかがめたりしても、それは体操であつて敬礼ではありませんか……。」

丙「法然上人門下の行不退の人達は即ち形だけ真似た体操連中だったのですね。」

甲「身、口、意、即ち肉体の上に顕現せぬような心的現象を考えることは出来ませぬ。生命が内に燃える時、私どもはどうかしたいのです。どうかしたい要求には行が与えられます。『信心の酔ひのまはるものは五種正行の舞をまふ』とおつしやつたのです。信心はもちろん、行者自力の信心ではありませんか。如来の生命が私の上に動いて下さる時、私の信心となります。その信は外部表現として称名となります。どうかしたい私に名をよべとおつしやるのです。ですから蓮師も『念称是一と云ふことしらずと申し候ふ時、仰におもひ内にあればいろ外にあらはるゝとあり。されば信を獲たる体はすなわち南無阿弥陀仏なりと心得れば、口も心も一つなり』とおつしやるのです。わかりましたか。」

乙「わかりました。一切が矛盾なくうなづけました。」

丙「み名を称えることが絶対善だということを、もう一度言つて下さい。」

甲「私どもが行つてゐるあらゆる善事を一つ一つ調べて見るのです。善をはげんだようでも世間体を考えたり、何かのために行つたり、礼を待ちもつけたり、善人意識や、功利心や、名誉心や、そんな毒心の雑つた善をとり分けたり、私には永遠と絶対の価値を有する善はないのです。そうした私、永遠へ私を美しく創造してゆく力のな私に、廻向されるのは名号であります。仏心であります。如来は真実であり、名号はその表現であります。如来本願成就の全体であります。私の口から叫び出る名号、それは生きた如来であります。如来には一点の濁りをゆるしませぬ。絶対善であり、絶対真であり、美であります。何もない私の胸中にこの我ならざる我として六字名号が御誕生下さつたことは嬉しいことです。」

丙「有難うございました……………」

乙「誰かががんばれば面白い御縁がたつていいですなあ。」

乙「私は一切を妥協しませぬ。私は私の道をゆきます。」

甲「それがいいことだ。つまり自分は自分であればいいのだ。皆な休まう。」